

## 言葉は漢字と一緒に

私が「漢字教育は幼稚園から」といふ事を提唱してもう二十年になるが、その間、指導に当る先生方に特に注意してもらった事は、“漢字を”教へるのではなくて、“漢字で”教へることである”といふ事であった。それは、先生方が口で子供たちの耳に訴へる言葉の中で、この言葉だけは子供たちの頭の中に刻んで置いてもらひたいと思ふ言葉を漢字で示し、子供たちの目に訴へることである。

その“漢字”を教へてやる必要は全く無い。幼児は教へてもらはなくても、「あの字はどうも といふ字らしい」と思ふものであり、さう思へばそれだけで漢字が覚えられてしまふものである。だから、「漢字を教へる必要は無い」と言ふのである。そして、かういふ教育法を、「“漢字で”教へる”教育法と言ふのである。

漢字は「目で見える言葉」である。「百聞は一見に如かず」の諺通り、目の働きは耳の働きよりもずっと強力であるから、漢字は言葉よりも覚え易く、頭の中に残り易いのである。その理由は、言葉は発するや否や消えてしまふけれども、漢字は覚えるまで消えずに待ってゐてくれるからである。だから、ヴィッテは言葉を語りかけたただけであったが、言葉を漢字に表してこれを見せながら語りかけたらもっと素晴らしい結果が現れ

ることを確信する。

実は、これを家庭で、自分の子に実践したお母さんがゐる。『天才児を創る』の著者、三石由起子さんである。三石さんは私の『漢字による才能開発法』（講談社）も『石井沢漢字教育法』（グリーン・アロー出版社）も読んだ方であるが、「私は半信半疑で、三歳だった娘と二歳だった息子に教へました」と言ひながら、その一年後には、「私の息子は、三歳で漢字混りの日記が書けるやうになりました」と書いてゐらっしゃる。

その教へ方は、先に述べた「言葉を、出来るだけ漢字で書いてこれを見せながら話す」といふ方法である。この方法は、私が二十年来幼稚園の先生方に言ひ続けて来てゐる事であるが、漢字教育に熱心な先生でもなかなかここまでは行ってくれないものである。それを三石さんは家庭でこれを二人のお子さんに実践されたのであるから、私は実に嬉しかった。

三石さんは「子供とは『漢字でしゃべる』 会話に出てくる漢字(実は言葉のこと)はその場で書いて見せる」といふ見出しの項で次のやうに書いてゐらっしゃる。

「漢字カードはあらゆる機会をとらへて作るやうにした方がよいと思

ひます。私の場合はかうでした。『お父さんは?』と子供が訊いたら、『まだ、会社よ』と書いて“会社”と書きます。三〇分もたって、『まだ会社?』と子供が訊いた時には、『さう、会社』と言って“会社”ともう一度書きます。言ふまでもなく大きな字で、です」

「子供が何か話しかけてくる時、私はそれに対して答へながら、さり気なく黒のマジックインキで、ワラ半紙に漢字を書きつけていきます」と。

これを実践すれば、幼児期の三年間に、小・中学校の九年間に学習する漢字の大半は覚えて読めるやうになることは間違ひないのであるが、いくら私がさう言ってもそれが信じられないらしく実践してくれる人が今までみなかった。それを三石さんが実践してくれたのである。

三石さんだって、最初は「半信半疑で教へました」とある。半信半疑でも実践すれば必ず解るのであるから、「効果が無くて元々。騙されたつもりでやって見よう」といふ気持が必要だな、と私はつくづく思った。漢字学習では誰も苦しんだ経験を有つものだから、幼児に覚えられるわけが無い、と思ひ込んである。だから、信じられるわけが無い。半信半疑になれば立派なものである。問題はその時、それを実践して見るかどうかである。

食べ物の味は食べてみれば直に判るが、食べてみない限り、いくら考へてみても決して判るものではない。ところが、見た目が悪いと、たいてい食べてみようとしなない。“食はず嫌ひ”が多いのである。幼児期の漢字教育が二十年経ってもこの程度にしかならないのは、試してみれば直に判るのに、試してみようとしなない“食はず嫌ひ”の態度に原因があるのである。

三石さんの体験談『天才児を創る』が、世のお母さん方の「ほんとか嘘か、私もやってみようか知ら」といふ気持を起させてくれることを期待し、祈るものである。